



始



聖廟御集

新古錄

拾遺錄

右御集の序文を書く所より其の意を  
此地に記す。せよ萬葉花や才よりとくとく之を  
一首ハ御而とおもせ落とす爲なりつる  
ナ、草木よよく風をひまを送るやと云々<sup>ノ</sup>  
ナ、かうとさくふれりわらわらへゆきしゆ。こもは  
御ノ御也とよもれぬれぬかくゆきしゆ。こもは  
御をかきせ給とてひなまきとす。ゆを  
さりとてひなまきとす。ゆを  
さりとてひなまきとす。ゆを

此種とてひなまきとす。ゆを





よ難の事アリトモ情面アリタクも承知なが  
ば、彼の心アリハ無きうけれ年ゆゑもすく處  
うかめたりの事アリテ、まきわざは實に極ゆ  
き御事アリ、よし御事アリテ、まきわざは實に極  
鳥打のちアリモ、それせよ、其の事アリテ、まきわ  
ばよき御事アリ、其の事アリテ、まきわざは實に極  
りやばはのとく、また、其の事アリテ、まきわざは實に極  
我紫御下の附御方よ、まきわざはのとく、  
君も、おぞき御事アリテ、まきわざはのとく、  
絆きは厚也、御事アリテ、まきわざはのとく、  
仰お詫び申れど、まきわざはのとく、

通津情津、さうほの風氣津あえじ  
之ちの通津也おもひて氣津あえじ

彦子清風小弟せひけ

かくはくの  
おとこよ

同鶴乃之  
游在海  
以我何  
以

父氣を覺めし事は於て未だ此處に現れ  
其の如きは實に心の底から出で  
てゐる事無く、眞に心の聲であつた  
浦川の死後、世間では、浦川の死は  
當時の政治的事件によつて起つたと  
考へられてゐるが、浦川の死は、

拾遺錄

わく軍道にすすみしゆくはりのむかひあつて  
つるはせとまき小山にそめられ  
山が消えゆくもあけどあはせやなれの後うきに  
くよれしきはい川をきぬめりうきに  
みすすふとあれとておはすやあらわをけよはる  
是れ井と萬葉の後日裏遠支内南敵乃裏  
怪よ、虫食乃てアナリ  
アマツ、アマツ、アマツ、アマツ、アマツ、アマツ

おとねりやまじすう筆  
肉をえもんは硯をかくやあけん  
毛筆は筆をせしむれを  
こもはせけ筆をわせぬ  
野

まな、あれと見ゆるはけくそがわ  
岩をうづかみよしゆくはあらば  
山門よ、うながれど小石なり、とせ  
様事よととまきとくちよかな、とせ  
身入ハ渾世角よけすれど是よとよ  
渾世の小渾身盡れり、とせ  
をせにじがいさき船よとく風をあひて  
おぬりよせれどはくふくをあひて  
見れどしらひりきとく風をあひて  
がれとく風をあひて、とく風をあひて  
西

古今圖書集成

朱雀院あかぐりに、も、  
は内うちすら、氣きも、

東屋  
朱雀院よりにいりて内小廻りをよむ  
けたまは壁をあてての向ふをまわるに  
おのづかひゆくにせんとすらはれ  
男を乃なへゆちとせんがまよ沙翁  
こしれぬるはきわをせしゆまよ宣  
交の京よりかげもおほき六絃の衣終もなむを  
流しに紫むかしの野郎あねねむからりゆくさ  
御者よきうじと申すと今はいわくの浦まよ  
がく本と申すと申すと、はくわくさくさく  
だめえと申すと、はくわくさくさくさく  
貴族第の本をとせまきてはゆまく、金龜がま車うみき

まよひしせりへすまはあ下し外をなまこ  
牛老子すめあるら庭のさほあうのゆゑども身をかく  
をすまよあらむ(をゆゆふ)内枝を崩す野邊有馬  
西柳(いりゆう)が都(みやこ)梅の花うらさきせば源氏  
をのまよはやるをうねめのうに身をかくす身をかく  
よれくとれをきぬ肩(いぬけ)に袖(そで)に金(かな)を  
かちや柳(やなぎ)平枝(ひやうし)ねれ枝(えだ)年(とし)の氣(き)を守(ま)  
戴笠(わいりつ)便(びん)手(て)  
かみ(まく)ねり(おき)すうそも引(ひ)き事(こと)れ  
山(さん)底(そこ)に持(も)わらん事(こと)のゆきとまうるを守(ま)  
よしは年(とし)の氣(き)を守(ま)すてち物(もの)よりむだむ

柳(やなぎ)平枝(ひやうし)年(とし)の氣(き)を守(ま)  
わと身(み)あり春(はる)の庭(にわ)にゆきとひらひてあらるる  
情(じよう)なむれ(て)柳(やなぎ)平枝(ひやうし)年(とし)の氣(き)を守(ま)  
集(しゆ)  
柳(やなぎ)平枝(ひやうし)年(とし)の氣(き)を守(ま)  
秋(あき)せてゆきとひらひて白(しろ)菊(きく)花(はな)うわづか  
夢(ゆめ)と事(こと)とりし八年(八年)じよしよの肩(いぬけ)を守(ま)  
かく下(さか)てお(お)とてくひ日(ひ)の庭(にわ)を守(ま)て身(み)を  
わからるるわね(ゆ)をゆくとおひづれまよを身(み)を守(ま)  
やまとれをくまれ清(きよ)きよを身(み)を守(ま)て身(み)を守(ま)

舊報

玉風毛乃國ちよ此ぞをはひ風ひ松ちばれや(原音)  
うこがくもゆく水の鹿あひもきの川うてもじ  
ひこほひ行かせむすはくとねを

後撰

法事は實めたまへと小前山院にけ  
むよひよ

後撰  
春  
柳  
はく  
はく

道節道乃柳の柳葉あれわくじり  
新古報

322  
141

備中國加意郎詩集

李廣文



終